

# 一般化ヤコビ楕円関数とその応用

竹内 慎吾 (芝浦工大)

## 1 一般化三角関数

$p, q > 1$  を定数とし,  $x \in [0, 1]$  に対して

$$\arcsin_{pq} x = \int_0^x \frac{dt}{\sqrt[p]{1-t^q}}$$

と定義する. その逆関数を一般化三角関数  $\sin_{pq} x$  という (例えば P. Lindqvist (1995), P. Drábek-R. Manásevich (1999)). すなわち,  $\sin_{pq} : [0, \pi_{pq}/2] \rightarrow [0, 1]$  は全単射かつ単調増加, ここで

$$\pi_{pq} = 2 \arcsin_{pq} 1 = 2 \int_0^1 \frac{dt}{\sqrt[p]{1-t^q}}.$$

特に  $\sin_{22} x = \sin x$ ,  $\pi_{22} = \pi$  である. 関数  $\sin_{pq} x$  を,  $\sin x$  のように周期  $2\pi_{pq}$  の奇関数として  $\mathbb{R}$  全体に拡張したものを, 改めて  $\sin_{pq} x$  と表す.

関数  $y = \sin_{pq} x$  は微分方程式

$$(|y'|^{p-2} y')' + \frac{(p-1)q}{p} |y|^{q-2} y = 0$$

を満たす. したがって有名な  $(p, q)$ -固有値問題を

$$\begin{cases} (|u'|^{p-2} u')' + \lambda |u|^{q-2} u = 0, & 0 < x < L \\ u(0) = u(L) = 0 \end{cases}$$

の非自明解  $(\lambda, \pm u)$  は,  $\sin_{pq} x$  を用いて次のように書き表すことができる: 任意の  $n \in \mathbb{N}$ ,  $R > 0$  に対して

$$\begin{cases} \lambda = \lambda_n(R) = \frac{(p-1)q}{p} \left(\frac{n\pi_{pq}}{L}\right)^p R^{p-q}, \\ u = u_{n,R}(x) = R \sin_{pq} \left(\frac{n\pi_{pq}}{L} x\right). \end{cases}$$

## 2 一般化ヤコビ楕円関数

$\sin_{pq} x$  に合わせて, 講演者はヤコビ楕円関数  $\operatorname{sn}(x, k)$  を次のように一般化した.  $p, q > 1$  を定数とし,  $x \in [0, 1]$ ,  $k \in [0, 1)$  に対して

$$\operatorname{arcsn}_{pq}(x, k) = \int_0^x \frac{dt}{\sqrt[p]{(1-t^q)(1-k^q t^q)}}$$

と定義する．その逆関数を  $\text{sn}_{pq}(x, k)$  で表す．すなわち， $\text{sn}_{pq} : [0, K_{pq}(k)] \rightarrow [0, 1]$  は全単射かつ単調増加，ここで

$$K_{pq}(k) = \text{arcsn}_{pq}(1, k) = \int_0^1 \frac{dt}{\sqrt[p]{(1-t^q)(1-k^q t^q)}}.$$

特に  $\text{sn}_{22}(x, k) = \text{sn}(x, k)$ ， $K_{22}(k) = K(k)$  (第1種完全楕円積分) であり， $p > 2$  のとき

$$(1) \quad \text{sn}_{pq} x \xleftarrow[k \rightarrow +0]{} \text{sn}_{pq}(x, k) \xrightarrow[k \rightarrow 1-0]{} \sin_{\frac{p}{2}, q} x$$

$$(2) \quad \frac{\pi_{pq}}{2} \xleftarrow[k \rightarrow +0]{} K_{pq}(k) \xrightarrow[k \rightarrow 1-0]{} \frac{\pi_{\frac{p}{2}, q}}{2}.$$

関数  $\text{sn}_{pq}(x, k)$  を， $\sin x$  のように周期  $4K_{pq}(k)$  の奇関数として  $\mathbb{R}$  全体に拡張したものを，改めて  $\text{sn}_{pq}(x, k)$  と表す．

関数  $y = \text{sn}_{pq}(x, k)$  は微分方程式

$$(|y'|^{p-2} y')' + \frac{(p-1)q}{p} |y|^{q-2} y (1 + k^q - 2k^q |y|^q) = 0$$

を満たす．したがって境界値問題

$$(3) \quad \begin{cases} (|u'|^{p-2} u')' + \lambda |u|^{q-2} u (1 - |u|^q) = 0, & 0 < x < L \\ u(0) = u(L) = 0 \end{cases}$$

の非自明解  $(\lambda, u)$  を， $\text{sn}_{pq}(x, k)$  を用いて次の主結果にあるように書き表せる．

### 3 主結果

境界値問題 (3) の非自明解  $(\lambda, \pm u)$  で  $\|u\|_\infty < 1$  を満たすものは以下で表される：任意の  $n \in \mathbb{N}$ ， $k \in (0, 1)$  に対して

$$\begin{cases} \lambda = \lambda_n(k) = \frac{(p-1)q}{p} (1 + k^q) \left( \frac{2k^q}{1 + k^q} \right)^{\frac{p}{q}-1} \left( \frac{2nK_{pq}(k)}{L} \right)^p, \\ u = u_{n,k}(x) = \left( \frac{2k^q}{1 + k^q} \right)^{\frac{1}{q}} \text{sn}_{pq} \left( \frac{2nK_{pq}(k)}{L} x, k \right). \end{cases}$$

$1 < p \leq 2$  の場合，非自明解はこれ以外に存在しない．一方， $p > 2$  の場合は，各  $n \in \mathbb{N}$  に対して， $k \rightarrow 1-0$  とすると (1), (2) より  $\lambda_n(k)$ ， $u_{n,k}(x)$  はそれぞれ

$$(4) \quad \begin{cases} \lambda = \frac{2(p-1)q}{p} \left( \frac{n\pi_{\frac{p}{2}, q}}{L} \right)^p, \\ u = \sin_{\frac{p}{2}, q} \left( \frac{n\pi_{\frac{p}{2}, q}}{L} x \right) \end{cases}$$

に収束する．この解は  $\|u\|_\infty = 1$  を満たす．また， $L$  の代わりに  $L - \ell$  ( $0 < \ell < L$ ) としたときの (3) の解 (4) を利用して， $\|u\|_\infty = 1$  を満たす連続体濃度の (4) の多重解を構成できる．以上ですべての解が得られる．さらに，(4) の関数  $u$  はその解表示から  $(\frac{p}{2}, q)$ -固有関数でもあることがわかる．詳しくは講演で述べる．